

ひがたかんタイムズ

2017年 4 月 5 日発行 <第51号>

NPO 法人多摩川干潟ネットワーク 発行人：佐川 麻理子

干潟歳時記 22 ～川崎の海に生きている～

春が近づくとやはり水辺に足を向けたくなりますね。私たちがぐらす川崎の街には多摩川と東京湾という、川と海の二つの水辺があります。

どちらも大きな街に囲まれているので、ついつい見落としがちなのがこの水辺の自然。実はここには、今では珍しくなってしまった大切な生きものや植物などがたくさんあるのです。

たとえば、その中のひとつに「アサクサノリ」があります。今私たちが食べているノリはほとんどが「スサビノリ」といわれていますが、かつて多摩川河口で「のりひび」をたててノリを育て収穫し、食べる海苔にされていたのは、「大師のり」と言われていた「アサクサノリ」でした。

(アサクサノリ 環境省絶滅危惧種第1種 2015版 環境省 H/P 参照)

今は、のりつくりの様子を川崎に見る事はできませんが、実は自然の「アサクサノリ」は、今でも多摩川河口のアシ原でほんのわずかですが生きているのです。



冬アシの茎に着生するアサクサノリ 古い築堤の跡か(羽田側) 羽田側から大師橋を望む
さて、干潟に目を向けると、そこはまるで海辺と言っているような景色や、海の生きもの達に出会える事ができます。泥よりはサラサラの砂の干潟が広く現れたり、二枚貝の仲間が捨てたりと、まるで遠くの海に出かけたような気分が味わえる所も。春を迎え、身近にある素敵な海に、ちょっとでかけてみませんか。(お気をつけて^^)



砂浜の貝がら

砂質の干潟に多いマメコブシガニ

干潮時に広がる砂浜(羽田側)

写真/文 佐川麻理子 kaeru_mako@yahoo.co.jp